

UDLM

12

vol.313

December 31st
2021

都市を巡る
「旅」

- p.2 いま、「旅」を振り返って
- p.3-5 忘れられない「旅」を語る
- p.6-7 「旅」のこだわり集
- p.8 今年の1枚

いま、「旅」を振り返って

なぜ私たちは「旅」に出るのか

この2年間、「旅」に出る機会が減り、想像力を喚起する新しい発見や感動的な出会いが随分と奪われてしまったように感じる。〔旅の共有〕のプラットフォームをつくり、その渴きを少しでも潤すことができないだろうか。ここでは、今一度自分自身の「旅」を見つめ直し、その経験を他の人と共

有するため都市デザイン研究室のメンバー（B4・M2生・先生方）を対象に行ったアンケートの結果をまとめている。はじめに、都市と向き合う者としての幅広いこだわりが表れるそれぞれの「旅」観を紹介する。

どの国に行っても4-5日目に日本が恋しくなってマックに行き着く

旅は長期戦
徹底的にそのまちを味わうため、しっかり時間をかけて旅に出る。その長い旅を楽しむには、タスク処理や自分に合う食のリサーチなどの事前準備も欠かせない。

有名な観光地でもふとした路地でも直感的に好きだと感じた空間を写真に収める。

有名ラーメン店や麺料理店は押さえておく

「1都市3日」

可能な限り荷物を軽く

出張の際には、用事の前後になるべく一人の時間を確保して、気のおもむくままに知らない場所に行く。コインロッカーに仕事の荷物を全部預け、身軽になった瞬間、見知らぬまちに一步を踏み出す、その瞬間が最高に楽しい。

計画立てて行きたい場所をめぐると計画を立てずひたすら街をぶらぶらさまよう日を両方つくる

最近レンタサイクルやシェアサイクルがあり、自転車で巡ることも増えたが、基本はとにかく歩く。歩き続けて、そのまちの風景の中に没入する感覚が得られたとき、とても幸せな気分になる。

足でたくさん歩く

感じたことを留める
その場所、瞬間に見て、感じ、考えたことを記録し、自分の実体験として蓄積する。

25年くらい前から使っているB6サイズのハードカバースケッチブックは必ず持参。

わたしだけの“旅のおきて”

タスクに追われないように前日は確実にオール

Always try to book a guesthouse in the old city center instead of a hotel when traveling in China. Chatting with the owners and exploring the details of the houses' kodawari are so much fun.

バカンスでも観光でも旅行でもなく、「旅」であること、身体性やローカリティや偶然を大切にすること

ローカルな方とできる限り多くの言葉を交わしてそのまちの雰囲気を知る

外国では必ず本屋に立ち寄る。

どの言語圏の文学が受容されているか眺めたり、解説が理解できなくても雰囲気や伝わる美麗な写真集を手にとったり。（日本文学を集めた一角にも立ち寄るが、ハルキムラカミは強し。）

見晴らしが良い場所に行く

訪れたらまずは街の端を見る

その街で一番高いところのぼる

できるだけ最初にその街を俯瞰できる場所に行く

「旅」は、やはり一人で、見知らぬ土地をゆきたい。見知らぬ土地を鏡にして、自分に向き合いたい。

まちの「見方」

場所への理解を深めるためのこだわりが強く表れている。それは単に「空間を見る」ことにとどまらず、また空間ひとつとってもその視点は三者三様である。

忘れられない「旅」を語る

「自分の知らない風景に出会う」

建物が建つ環境全体を体感する、実際に体験し、自らが追い求める建築の姿に重ね合わせる。一安藤忠雄
旅を通じた実空間の体験、場の使われ方の観察が設計に活き、「見たことのない空間」から“エネルギー”を貰うー伊東豊雄
〔建築への旅、建築からの旅〕より〕

いろいろな経験ができることで想像力が刺激され、新たな発見を重ねることができる。一北川原温

「旅」を通して、見たことなかった風景に出会い、自らの実体験として蓄積する。そして私たちは、それらを自らが追い求める都市の姿に重ね合わせながら今後も都市について思考を巡らしていく。そうした意味で、「旅」はこの先もずっと続き、これまでの旅もまた自身

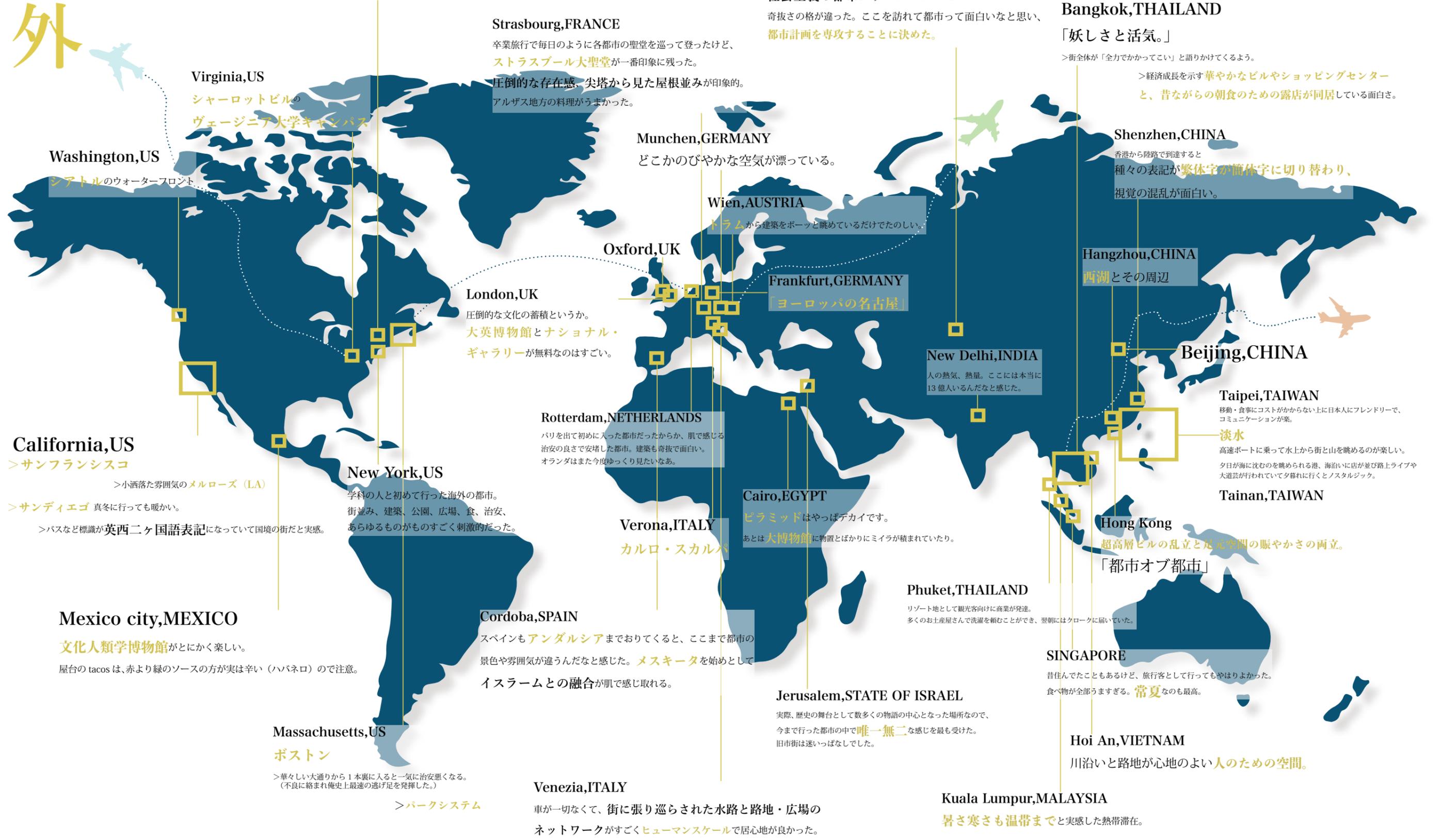
の思考やデザインに大きなインパクトを与える経験となっているであろう。以降では、これまでの旅を通して研究室メンバーが何を感じ、考えたのか、それぞれ印象深いものについて振り返ってもらった。

デザ研メンバーが選ぶ「旅」で訪れた印象的な都市



国内編

国編 外



New Jersey,US

教科書でお馴染みのラドバーン。

修士の頃、同期の栗原君と二人で訪ねたのを皮切りに、その後、10回近く訪れている。行くたびにとにかく中央ののびやかな緑地に心を洗われる。

Virginia,US

シャーロットビルの
ヴェージニア大学キャンパス

Washington,US

シアトルのウォーターフロント

California,US

>サンフランシスコ

>小洒落た雰囲気メルローズ (LA)

>サンディエゴ 真冬に行っても暖かい。

>バスなど標識が英西二ヶ国語表記になっていて国境の街だと実感。

Mexico city,MEXICO

文化人類学博物館がとにかく楽しい。

屋台の tacos は、赤より緑のソースの方が実は辛い (ハバネロ) ので注意。

Massachusetts,US

ボストン

>華々しい大通りから1本裏に入ると一気に治安悪くなる。(不良に絡まれ俺史上最速の逃げ足を発揮した。)

>パークシステム

Strasbourg,FRANCE

卒業旅行で毎日のように各都市の聖堂を巡って登ったけど、
ストラスブール大聖堂が一番印象に残った。

圧倒的な存在感、尖塔から見た屋根並みが印象的。
アルザス地方の料理がうまかった。

Munchen,GERMANY

どこかのびやかな空気が漂っている。

Wien,AUSTRIA

トラムから建築をボーッと眺めているだけでたのしい。

Oxford,UK

London,UK

圧倒的な文化の蓄積というか。
大英博物館とナショナル・
ギャラリーが無料なのはすごい。

Frankfurt,GERMANY

「ヨーロッパの名古屋」

Rotterdam,NETHERLANDS

パリを出て初めて入った都市だったからか、肌で感じる
治安の良さで安堵した都市。建築も奇抜で面白い。
オランダはまた今度ゆっくり見たいなあ。

Verona,ITALY

カルロ・スカルパ

Cordoba,SPAIN

スペインもアンダルシアまでおっていると、ここまで都市の
景色や雰囲気が違うんだと感じた。メスキータを始めとして
イスラームとの融合が肌で感じ取れる。

Venezia,ITALY

車が一切なくて、街に張り巡らされた水路と路地・広場の
ネットワークがすごくヒューマンスケールで居心地が良かった。

Nur-Sultan,KAZAKHSTAN

黒川紀章計画の首都が圧巻。

社会主義の都市スケールは計画規模と一つ一つの建物の
奇抜さの格が違った。ここを訪れて都市って面白いなと思い、
都市計画を専攻することに決めた。

Bangkok,THAILAND

「妖しさと活気。」

>街全体が「全力でかかってこい」と語りかけてくるよう。

>経済成長を示す華やかなビルやショッピングセンター
と、昔ながらの朝食のための露店が同居している面白さ。

Shenzhen,CHINA

香港から陸路で到達すると
種々の表記が繁体字が簡体字に切り替わり、
視覚の混乱が面白い。

Hangzhou,CHINA

西湖とその周辺

New Delhi,INDIA

人の熱気、熱量。ここには本当に
13億人いるんだと感じた。

Beijing,CHINA

Taipei,TAIWAN

移動・食事にコストがかからない上に日本人にフレンドリーで、
コミュニケーションが楽。

淡水

高速ボートに乗って水上から街と山を眺めるのが楽しい。
夕日が海に沈むのを眺められる港、海沿いに店が並び路上ライブや
大道芸が行われていて夕暮れに行くとノスタルジック。

Tainan,TAIWAN

Hong Kong

超高層ビルの乱立と垂直空間の賑やかさの両立。

「都市オブ都市」

Phuket,THAILAND

リゾート地として観光客向けに商業が発達。
多くのお土産屋さんで洗濯を頼むことができ、翌朝にはクロークに届いていた。

Jerusalem,STATE OF ISRAEL

実際、歴史の舞台として数多くの物語の中心となった場所なので、
今まで行った都市の中で唯一無二な感じを最も受けた。
旧市街は迷えばなしでした。

SINGAPORE

昔住んでたこともあるけど、旅行者として行ってもやはり良かった。
食べ物が全部うまさすぎる。常夏なのも最高。

Hoi An,VIETNAM

川沿いと路地が心地のよい人のための空間。

Kuala Lumpur,MALAYSIA

暑さ寒さも温帯までと実感した熱帯滞在。

「今年の1枚」

12月23日に行われた研究室忘年会では、各研究室メンバーが、2021年を振り返り、「今年の1枚」を発表しました。それぞれの印象的だった出来事や、来る2022年以降に向けた抱負が選り抜かれた1枚と共に語られました。皆様はどのような1年を過ごしましたか？



中島直人 准教授

金石の海岸近くの裏山、佐々木家稲荷という小さな避難場所の前面、かつて民家があった場所。避難場所指定は解除され、民家内を通過する避難ルートも消えた。「逃げるができる都市づくり」の象徴の記憶が失われないよう、復興計画史と避難場所形成の関係性について論文にしていきたい。



植田啓太 M2

江東区葛西橋の袂、釣りの船を貸し出す「舟宿」が集積している場所の写真。殺風景な場所にも豊かな体験は宿ののだと感じ、普段PJや研究で頻繁に訪れる福島の被災地で見ているものも、東京で見ているものも根本的には変わらないことを実感した。



宮園侑門 M1

A+Uの9月号で関わったインスタレーション。2000枚の写真が手作業で壁に貼られ、機械学習の地道なプロセスが表現された。アーバンサイエンスはハイテクに思われがちだが設計のスタディと本質的に変わらず、いかに異なる手法を融合させるかを考えることが重要だと実感した。



金盼盼 D1

今年、浙江大学大学院を修了した時の写真です。背後に写っている建物は、日常を過ごしたキャンパスで、一緒に写っている人たちは、修士を共に過ごしたクラスメイトです。現在はオンラインで皆さんに会うのみになっていますが、リアルで研究室に参加できる日を楽しみにしています！



岡本亮太 M2

夜の東大正門前のイチョウ並木の写真。普段見続けてきたシンボリックな空間が、綺麗に紅葉することで、違った表情を見せており印象的に感じた。来年からもまちに関わる仕事に就くので、継続して地域に引き継がれてきた歴史や固有の空間を大事にしていきたい。



渡邊大祐 M1

卒業制作を福島県相馬市の方々に発表した際の1枚。現地の方々の喜んでくださっている姿を見て、全身の力が抜けたことを覚えている。今年度はコロナの状況もあり、あまりお手伝いをする事が出来なかったが、来年以降は機会を見て現地に通り、自分なりに被災地に向き合い続けたい。

COLUMN

BOOK OF THE MONTH



形態デザイン
講義
内藤廣
王国社
2013

推薦者
M1 若松

建築学科の製図室で設計資料集成と同じくらい見かけた一冊。「構造デザイン講義」「環境デザイン講義」と併せて、内藤廣が本学で行った講義を集成している。建築とは何か？設計とは何か？これらの問いに向き合う勇気を与えてくれた。

WEB MAGAZINE

続きは都市デザイン研究室 HP で！
<https://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ia/blog/>



産官学金ミーティング開催！

みなかみPJでは、水上温泉街の再生の方向性を位置付けるまちづくりビジョンの叩き台を作成しました。地図を囲んで四者で話し合い、認識や期待の統一を図りました。(M1 合田)



デザ研忘年会開催

念願の対面開催でした。「今年の一枚」写真とそのエピソードを発表し合い、2つのお店に分かれて食事、と大充実の会となりました。同じ場を共有できる機会が増えていくことを期待したいですね。(M1 杉本)

LOOKING BACK AT DECEMBER

6th	みなかみ	産官学金報告会
9th	富士吉田	現地調査
16th	上野	第6回いけまち
19th	手賀沼	生き物観察会
20th	みなかみ	地元ヒアリング
23rd	@研究室	忘年会

研究室会議 2nd,16th,23rd

POSTSCRIPT

季節や気候、人（同行者・現地の方）などの環境全体がその旅を印象付ける大きな要素として、十人十色の「旅」を彩っていた。これを読み、また新しい「旅」に出てみよう、そんな気持ちになってもらえば嬉しい。(M1 神谷)